保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人　大地福祉会
施設名	遊こども園
報告者（役職）	宗村　紀子（主幹）
住所・連絡先	大阪府堺市東区日置荘西町 1-7-1
	☎　072-247-4730 E-mail　yuukodomoen@bz04.plala.or.jp

○タイトル（保育計画）

しなやかなからだとこころを育もう～全身運動遊びを通して～

○主な助成備品

マット・スーパーフォーミング・二輪スクーター・肋木等

１．保育計画策定の目的

本園は、令和３年度に開園した新設園である。駅近という環境のため、園の前は自動車や自転車の交通量が多く、近隣には公園などの遊び場もないため散歩に出かけることは難しい状況にある。その中でも、子どもたちの発達には欠かせない、遊び込めるたくましい体づくりを保障しようと、広い遊戯室や園庭を確保し、年齢に応じた運動遊びに取り組んでいる。

遊びのなかで子どもたちは学びを深めていくが、その根本となるのが元気な体である。体づくりの基本として、リズム運動を行うとともに、全身を使った多様な遊びを通した運動体験を大切にしたいと考えている。今回、様々な運動遊具を導入させていただくことで、子どもが遊び込める、たくましい体づくりをするための経験を積んでいけることを期待して、保育計画を策定した。

２．具体的な実施内容

《０歳児》「安心する」～環境に慣れ、安心してさまざまな探索活動をする～

自分で動くことが何より楽しい０歳児。保育者との信頼関係の中で、安心して十分に探索活動を保障したい。歩行の獲得に向けて、四つん這いの完成が課題である。

入園時、歩行している子どもが２名、ハイハイの子どもが６名、首の座っている子が１名であった。全身の揺さぶり遊びや、ふれあい遊びで体の諸感覚を目覚めさせていった。また、夏に向けては、水・泥遊びを豊かに経験した。その中で、魅力的な環境に心動かされ、探索活動が増していった。秋になると、よじ登ったり、乗り越えたりすることが楽しくなってきたので、次のような遊びを展開した。

山越え谷越えレッツゴー（スーパーフォーミング・マット等）

スーパーフォーミングの山をよじ登ったり、山の上で上手に体勢を変えて降りたりして遊んだ。下にはマットをひき、ダイナミックかつ安全に遊ばせることができた。また、子どもの実態に合わせて、自由に組み変えられ、毎日環境を変化させられるので、毎日新しい探索活動を十分に保障できた。用意して、片づける保育者の姿を繰り返し見て、真似して用意しようとしたり、片づけたりする姿も出てきた。適度な大きさと、重みがあるので、「力持ちだね～」の言葉がけに嬉しそうにこたえ、やる気いっぱい押したり持ったりして運ぶ姿があった。

でこぼこ道を歩こう（肋木の板）

ローガード歩行になってくると、またぐという動きが面白くなってくる。肋木の板は、高さ４センチ、幅２センチの仕切りがついており、よく見て、バランスをとりながら足を上げ、一瞬片足で全体重を支えてまたぐ。０歳児にとってはちょっと難しいが、繰り返し飽きずにまたぐ。段々慣れてくると、スーパーフォーミングで少し傾斜をつける。スーパーフォーミングは滑らないので、がたがた揺れずにちょうどよい坂道ができる。

転んでも、しっかりハイハイを経験した０歳児は、手をつくことができていた。また肋木の素材は木なので、足裏に程よい刺激があり、触り心地や香りもよい。万が一体を打っても大けがにはつながりにくく、保育者にとっても安心して遊ばせられる遊具であった。

《１歳児》「行動する」～自分でできるよ、もっとやりたい！と、能動的に動く～

それぞれが自分で動けるようになっている１歳児。動きたい要求を満たされるような環境や遊びを用意するなかで、活動量を保障することが大切である。運動能力としては、歩行の確立を目指したい。

スーパーフォーミングでボールプール

４月は、すっかり慣れて遊びを楽しめる子ども、担任が変わって不安になる子ども、初めての集団生活で不安いっぱいで泣く子どもなど、様々な様子を見せる１歳児クラス。しかし、物を使って遊ぶことができ始める（対照的行為）ので、友達と同じ場で、豊富に量を用意し、一緒に遊べるような環境を設定した。

スーパーフォーミングを立てた中にボールを入れる。

子どもたちはスーパーフォーミングをまたいで中に入り、保育者や友達と一緒にボールの中で遊ぶ。好きなだけボール遊びを楽しめる。また、スーパーフォーミングが倒れると、ボールが一気に広がるのも楽しい。保育者がスーパーフォーミングを組み立て、「いーれーてー」と声をかけると、中にボールをどんどん入れようとする。量と時間を確保し、満足するまで遊び込むことができた。

《２歳児》「挑戦する」～ちょっと難しいことをやってみる～

歩行が確立した２歳児は、少し高いところをハイハイする、走る、体の向きを入れ替えるなど、少し難しいことをやってみたくなる。特に、斜め姿勢の獲得が大切である。斜め姿勢は、手足の指先に力を入れて瞬発的に体位を変動させ、バランスを復元させる。これが基になって重心を移しながら、体を動かす様々な動作（ジャンプする、走る、飛び降りる、ケンケンするなど）が可能になる。

マットの上で消防車ごっこ

園前の道路はよく救急車両が通る。その度に窓にくぎ付けになり見ていた２歳児。自分たちも消防車に乗り、「ウーカンカン」の音に合わせて走っていた。

マットを出すと、赤は火、青は水というルールができ、赤いマット＝火の上を「あちちちち」と言いながら両足跳び。青いマット＝水に、どぼーんと入るごっこ遊びが始まった。マットは色がはっきりしているので、色が分かり始めた２歳児にとって、つもりになって遊べる環境となった。

肋木のはしご渡り

四肢のロコモーション運動がさらに巧みになり、はしごを登ったり、９０センチの高さの肋木の上をハイハイで渡ったりすることが楽しくなった。初めは高さに恐怖心があった子どもも、繰り返し遊ぶことで目と体の協応が促され、どの子もはしごを渡ることができた。

肋木は子どもの手につかみやすい直径の棒が渡してある。また、間に挟まっても、下まで落ちないよう、絶妙な間隔ではしご状になっている。また、各パーツががっちりと組み合わさり、組み立てしやすく、ぐらぐらせず安定感があるので、様々な形に変化させて取り組むことができた。

《３歳児》「足腰を強くする」～走る、跳ぶ、飛び降りる、登る、しゃがむなどの基本動作を獲得する～

乳児期を過ぎ、様々な動作が可能になった３歳児は、さらに基本動作をたくましく獲得

していく。比較ができるようになるため、「やってみたい」と思いながらも、「できなかったらどうしよう」など、苦手意識を持つこともある。苦手意識を乗り越えるために、友達同士の刺激を大切にしたい。友達への憧れの気持ちを、保育者が言葉で代弁するなど、友達を意識しながら一緒に歩いたり動いたりすることで、直立姿勢と二足歩行を確立していき、歪みのない体を目指していきたい。

雨の日の遊び～常設大型遊具～

雨の日に、空き保育室を利用して常設している肋木で遊んでいる３歳児。２歳児より高い肋木を登り、体勢を入れ替えて中に入っている。高さ感覚が身につき、怖がらず、しかし慎重に乗り越えている。保育者よりも、目線が高くなることも嬉しいのである。

マットくぐり～遠足ごっこにて～

春と秋の２回、「遠足ごっこ」を園全体で楽しんでいる。各クラス、工夫して環境を用意するのだが、３歳児の部屋は、まるで公園遊具のようであった。一本橋、山登りなどがあった中で、子どもたちが喜んだのが、マットくぐりである。マットを鉄棒にかけて、それを押して進む。かなり重いし、向こう側が見えないので、初めは躊躇する子どももいたが、ぐっと押してくぐりぬけると、目の前がぱっと広がるので楽しんでいた。１，２歳児はハイハイで進む子どももいたが、３歳児になると手で押しており、まるでマットに挑んでいるようだった。力いっぱい踏ん張り、力を込めて押せていた。

《４，５歳児》「〇〇しながら〇〇する」～協応動作を豊かに～

４、５歳児は､二つの動きを組み合わせた協応動作を大切にしている。手と足を協応させた、ウサギやトンボのリズム運動などから始まり、だんだん高次化（縄跳び・跳び箱など）させていきたいと考えている。

側転をする

春から、様々な運動課題に取り組んできた。雑巾がけや手押し車など、手で体を支える運動により、肩、腕、手首を強くする。 運動発達は、中心から末端へ進むので、体幹を育てることを大切にしたいと考えた。

運動会では、側転に取り組んだ。側転は、５歳児ならではの運動で、みんなの憧れである。マットを敷いて、何回も繰り返して挑戦し、感覚をつかんでいった。

スクーターとスーパーフォーミングでドライブ

右は、スクーターに乗り、スーパーフォーミングで作った道に沿って走っている。友達とイメージを共にして遊ぶことができ始める４、５歳児が、一緒にコースを考えた。

左は、スーパーフォーミングで自分たちが通れるほど大きいトンネルを作っているところである。力を微妙に調節して、協力して大きなものを作っていた。

３．その成果と評価

・大型遊具の部屋を作ることで、いつでも全身運動を楽しめた。活動量が増え、体を動かすことが身近になり、苦手意識が少なくなった。

・異年齢で同じ遊具を使うことで、「あんな風にやってみたい」という憧れの気持ちが芽生え、次の目当てになった。

・1 年を通して遊ぶことで、全身の発達が促された。また、以前との違いを子ども自身も感じ、友達と喜びあったり、自信につなげたりする姿があった。

・保育者にとっては、大型遊具が充実したことにより、複数のクラスで協力して全身運動ができるようになった。また、同じ遊具を違う学年が使うことにより、年齢による遊び方の違いに着目し、発達に応じた内容を選び、子どもの運動能力の様子をとらえようとする努力が見られている。

４．今後の課題と展望

子どもたちの発達にふさわしい環境設定を工夫していくこと。そうして、子どもの遊び方や、環境設定の工夫を図に表し、共通化していきたい。遊びの中で子どもの育ちをとらえ記録することで、０歳から６歳まで、６年間の育ちを見通して保育する力につなげていきたいと考える。

以上